医学生・看護学生と地域住民をむすぶコミュニケーションマガジン

vol 24
2025. 3

めでる

「長浜大手門通り商店街（長浜市）」

Contents

2 特集
春の宿泊研修in長浜市・湖北地域方面
- ●訪問先の皆様の紹介
- ●宿泊研修に参加して(学生の声)

10
- ●滋賀県医師キャリアサポートセンター
- ●滋賀県

13 ●「学内で地域医療の体験ができる」課外授業シリーズ2024 第一弾！～第五弾

20 編集後記

NPO法人「滋賀医療人育成協力機構」広報誌

春の宿泊研修in長浜市・湖北地域方面

令和6年3月14日(木)～15日(金)

1日目

中河内診療所・中之郷診療所

滋賀県最北の診療所である中河内診療所と中之郷診療所に東野克巳副院長、浦山先生、景山先生のご案内で訪問させていただきました。
東野克巳副院長から診療所の特徴などお話しいただきました。

この研修で訪れた滋賀県北部の医療機関はどこも印象的で、その土地に暮らす人たちの健康を守る上で欠かせない役割を担っていると実感できました。
参加学生感想より

湖北方面の暮らしや街に合わせた医療体制などを知ることができました。
参加学生感想より

湖北病院

湖北病院が管理する2カ所の診療所から戻り、湖北病院にて研修を行っていただきました。
久田先生から病院の概要や地域活動状況についてご説明いただきました。また看護部長より地域の見所なども含め、地域包括ケアシステム、看護師の働き方などご説明いただきました。
地域の方とのふれあいを大切にされているお話をしていただきました。

病院・診療所訪問で感じたのは、高齢社会において、訪問診療や巡回診療は必須になるだろうということだ。高齢者にとって、病院や診療所に行くというだけで大きな障壁となっており、地域に医療を提供するためには、そのハードルを下げる訪問診療や巡回診療は重要になってくるだろうと考える。
参加学生感想より

地域の医療体制を知り、それぞれと連携しながら地域全体で患者さんを診る必要があるということを学ぶことが出来た。
参加学生感想より

学校の授業の実習として地域医療を学ぶより、実際に現地に行き、その土地の雰囲気や住民の方と交流することができるので、どのような医療がその地域に適するのかなど学校とは異なった様々な視点で地域医療について考えることができました。　参加学生感想より

長浜赤十字病院

楠井院長から長浜市の医療についてお話しいただきながら、ご挨拶いただきました。
施設見学の後、江川副院長から病院の概要についてご説明いただき、最後に医学科・看護学科に分かれて本学卒業生との研修を行っていただきました。

長浜市WS

研修初の試みで行政主催のワークショップを行いました。
少子高齢化の問題について行政・学生・教職員で意見交換を行いました。

交流会　＊グランパレー京岩

浅見長浜市長より開会の御挨拶をいただき、是非長浜市で医師・看護師として活躍していただきたいとのお話がありました。
また、訪問先の関係者の方々や行政の方々、里親の先生方、プチ里親の方にご参加いただき、学生との交流をはかっていただきました。
貴重な意見交換、懇談の場となりました。

＊滋賀医科大学生13名（医学科12名、看護学科１名）と滋賀県立大学生１名が参加しました。

浅井東診療所にて

2日目

浅井東診療所

２日目の午前中に浅井東診療所を訪問させていただきました。
４つのコース(訪問診療同行、地域フィールドワークなど)に分かれて、それぞれ充実した研修を行っていただきました。

訪問診療を実際に体験し、患者さんやご家族の生活背景が密接に医療と関係していることを改めて感じました。
参加学生感想より

全人的医療体験学習で画面越しにお話を伺った患者さんと、実際にお会いできたことが特に印象的でした。全人的医療体験学習、本研修を通して、ひとりの人の人生に寄り添うことを学んだように思います。
参加学生感想より

先輩医師からのリアルな病院事情や働き方の話など聞くことができ、医師として働く将来への想像ができました。
参加学生感想より

高齢化・過疎化が進む地域において住民の方々がどのような思いを抱いて生活されているのか（どのような困りごとがあるのか）、診療所がどのような存在なのかを直接伺うことができました。
参加学生感想より

今回の実習のフィールドワークを通して医師として人の幸せに貢献できる価値を再確認することにも繋がり、参加して良かったと感じた。
参加学生感想より

本や授業で、在宅診療について見聞きはしていましたが、今回、初めて自分で体感し色々と考えさせられることもあり、感じることができました。自分が将来、滋賀でどうするかについても、得ることが多かったです。
参加学生感想より

未来の湖北地域の住民の安心安全を見据えたあり方の探究がされている様子を見ることができました。その際には、単に医療に留まることのない広い視点、多様な価値観、想像力が重要だと考えられます。
参加学生感想より

市立長浜病院

研修の最後に市立長浜病院を訪問させていただきました。高折院長から病院の概要についてご説明いただき、医療に対する姿勢を見てもらいたいとお話しいただきました。また、本学卒業生の研修医の先生や看護師の方に質問させていただき、丁寧にご回答いただきました。

医療と市政は繋がりがあるとは言いつつも、医療に携わる者としては、大きく市政に関与することはないと考えていたが、医療は市政における大きな一要素であり、特に地域医療においては、市政の方針に対応した医療が求められる。
参加学生感想より

地域の課題や単なる医療行為だけではない地域における医療の役割について考えを深める良い機会となりました。
参加学生感想より

同じ地域でも各病院にそれぞれの特徴があり、どのような分野に力を入れており、ホスピタリティが異なっていることを知ることができ非常に面白かったです。
参加学生感想より

長浜市は市を挙げて医療課題に取り組み、各病院間では役割分担を行っていた。医療と行政は切り離せない関係にあり、医療の質や提供体制は市民生活にも大きな影響を与える。
ただ医療を提供するだけでなく行政との連携も含めて、患者さんが地域で生活していくための医療という観点を忘れずにいようと思った。　参加学生感想より

ワークショップや散策、交流会を通して、長浜市に住んでいる人たちは大津市に住んでいる私たちと同じであり、寧ろ、これからの在り方をより先まで見据えて地域をつくっていると思った。　参加学生感想より

救急医療（特に３次救急）に興味があり、高度な最先端医療ばかりに興味をもっていたが、本研修によってより視野が広がったと感じた。２日間の研修の中で、どちらかというと総合診療寄りの地域医療の現場に触れ、地域との連携の重要性に気づくことができた。
参加学生感想より

長浜の発展に尽力されている方々の熱い思いを充分に感じることができた。
参加学生感想より

集落地域での診療所のあり方と、慢性期、亜急性期、急性期の臨床の様子を長浜市の病院をまわって見る機会を得ました。　参加学生感想より

～ 里親学生支援室からのお願い ～

将来、滋賀県内で働くことに興味を持っている学生(里子)に対して、県下で活躍する一先輩として、学生生活や将来の進路などの相談にのるアドバイザー(里親)を募集しています。
本事業に賛同していただける方は、里親学生支援室までメールで職業・氏名・「里親希望」と明記の上、お申し出いただきますようお願い申し上げます。
（事業の詳細はHPをご覧ください。）

お問い合わせ先　滋賀医科大学里親学生支援室
TEL：077-548-2072　E-mail：satooya@belle.shiga-med.ac.jp
URL：https://www.shiga-med.ac.jp/~satooya/

今回も地域の方々をはじめ沢山の医療関係者等の方々にご協力いただき、学びの多い研修となりました。ありがとうございました。

長浜市立 湖北病院

病院の特色

へき地医療に早くから取り組んでいます

昭和 50 年 12 月に厚生省からへき地中核病院(現在は「へき地医療拠点病院」)の指定を受け、山間部にある余呉町中河内診療所、木之本町杉野診療所、金居原診療所に年間 70 日の巡回診療を実施しています。

高齢者の福祉との連携に努めています

平成元年 4 月に滋賀県で初めての病院併設型老人保健施設を開所しました。

病院敷地内には、特別養護老人ホーム、ケアハウスなどの福祉施設が民間で運営されており、協力医療機関として、医療・保健・福祉の包括的なサービスを提供しています。

高齢者の保健・福祉・介護などに関する総合相談窓口となる地域包括支援センターの運営を受託しています。(担当地域は、木之本・余呉・西浅井)

内視鏡部門の充実に努めています

上部・下部内視鏡、ポリープや消化器早期がんに対する内視鏡的切除術を積極的に行っています。

透析医療の充実に努めています

昭和 49 年に 2 床からはじめましたが、地域の高齢化の進展等に伴い、透析患者さんが年々増加したため、平成 18 年に受け入れ態勢を強化し、30 床に増床しました。

病院データ

病床数 140 床	一般病棟 48 床、地域包括ケア病棟 35 床、医療療養病棟 57 床
診療科 18 科	内科、外科、整形外科、皮膚科、泌尿器科、小児科、眼科、歯科口腔外科、耳鼻咽喉科、神経内科、呼吸器内科、消化器内科、婦人科、放射線科、リハビリテーション科、麻酔科、精神科、循環器内科
指定病院等の主な状況	へき地医療拠点病院、救急告示病院、病院群輪番制病院、地域包括医療・ケア認定施設、在宅療養支援病院
併設施設	介護老人保健施設 84 床、訪問看護ステーション

長浜市立湖北病院
住所:〒529-0493
滋賀県長浜市
木之本町黒田 1221 番地
TEL:0749-82-3315(代表)
FAX:0749-82-4877

湖北・長浜には、豊かな自然と（戦国時代を彩った）歴史があります。姉川の戦いの後、1573小谷城陥落。浅井長政攻めの功で湖北の地を拝領した羽柴秀吉は、信長の一字から当地を長浜と改名、初代 長浜城主となります。本能寺の変の後、信長の後継者を巡りともに家臣であった秀吉と柴田勝家が対立、ここ湖北の地で大合戦を繰り広げました（1583年 賤ヶ岳の戦い）。これに勝利した秀吉はその後「天下びと」となるのです。その賤ヶ岳の麓、軍師官兵衛・黒田家ゆかりの長浜市木之本町黒田に湖北病院があります。当院の歴史はとても古く、大正４年伊香郡愛郷会伊香病院として開院しました。昭和５０年に“へき地中核病院（へき地医療拠点病院)の指定を受け、同 58 年に現在の地に新築移転、総病床 220 床の「伊香郡病院組合立湖北総合病院」として再出発しました。当時開設された無医地区での出張診療所は現在も市内３地区で診療しています。平成元年に病院併設型老人保健施設を開所、平成７年に福祉センター事業を開設、平成12 年に訪問 看護ステーションを設置するなど、湖北地域の医療・福祉・介護の中核を担ってきました。平成22 年長浜市との市町合併に伴い、『長浜市立湖北病院』と名称変更し現在に至ります。地域住民の皆さまの病院に対する温かいご理解と医師会先生方や市内の２つの総合病院、福祉・介護関係職種の皆様との連携・協力をいただいて診療していますが、地域の中小病院だからこその魅力もいっぱい、職員は毎日楽しく仕事をしています。

長浜赤十字病院

病院の概要

病床数：492 床（一般 418 床、精神 70 床、感染症 4 床）

診療科目：内科、消化器内科、循環器内科、糖尿病・内分泌内科、 神経内科、血液内科、呼吸器内科、内視鏡内科、肝臓内科、小児科、精神科、救急科、外科、乳腺外科、肛門外科、呼吸器外科、整形外科、脳神経外科、形成外科、内視鏡外科、皮膚科、血管外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻いんこう・頭頸部外科、リハビリテーション科、放射線科、病理診断科、麻酔科、歯科口腔外科

指定施設：救命救急センター、救急告示病院、地域医療支援病院、滋賀県肝疾患専門医療機関、地域周産期母子医療センター、日本医療機能評価機構認定病院、第 2 種感染症指定医療機関、災害拠点病院（地域災害医療センター）（備蓄倉庫・ヘリポート）、滋賀県災害拠点精神科病院、滋賀県基幹原子力災害拠点病院、臨床研修指定病院、臓器提供施設指定病院、精神科応急入院指定病院、指定自立支援医療機関（更生医療・育成医療・精神通院医療）、エイズ協力病院（長期療養協力医療機関）、長浜赤十字訪問看護ステーション、滋賀県地域がん診療連携支援病院、滋賀県重症難病医療拠点病院・協力病院、一次脳卒中センター（PSC）、各種医療保険取扱医療機関、紹介受診重点医療機関、滋賀県 HIV 長期療養協力医療機関、滋賀県災害拠点精神科病院

「自然と歴史が調和した街で」

当院は、東に伊吹山を仰ぎ西に琵琶湖を望む豊かな自然に囲 まれ、歴史を感じる佇まいを数多く残す大河ドラマでも有名 な長浜に位置します。「人道と博愛」の赤十字精神にのっとり、 やさしさのある全人的医療を提供することを病院理念に掲げ、湖北地域の救急医療、地域 医療、周産期医療等に貢献できるよう日夜取り組んでいます。また、赤十字病院の特色の 一つでもある救護班を常備し、災害発生時にはいつでも出動できるよう準備しています。

救命救急センター、地域災害医療センター　県北部の救急医療を担う救命救急センターとして 365 日数多くの救急患 者を受け入れます。また、地域災害医療センターとして救護班・ＤＭＡＴ、 備蓄倉庫を備え、災害発生時にはいつでも力が発揮できるよう多種多様な訓練も行い準備しています。

地域周産期母子医療センター　湖北・湖東の周産期医療の中心的役割を担うべく、母体搬送、新生児搬送等 24 時間対応しています。多くの低出生体重児がＮＩＣＵで治療を受けています。

地域医療支援病院、滋賀県地域がん診療連携支援病院　地域の中核病院として地域に根ざした医療が展開できるようスムーズな患者の紹介・逆紹介のシステムを構築する とともに、地域の医療従事者の資質向上を目指し公開講演会・研修会も数多く開催しています。また、地域の診療所 へも実習等で受け入れていただき、良好かつ密接な病診連携を推進しています。

3 月 14 日（木）学生さんたちをお迎えし、ヘリポートに上がって見学いただきました。そこからは良い眺望が得られるだけでなく、湖北医療圏、近隣の病院などが一望できます。高齢化に関して色々なことが言われている中、滋賀県では湖北がその先進地とも言えます。高齢化がより進行しているだけでなく、在宅看取りや施設での看取りは県内でも多く、在宅医療に熱心な地域診療所の医師が多数いるなどの特色もあり、今後ますますニーズが高くなる高齢者医療を学ぶには格好の条件が揃っています。医療は地域と共にあるものだと思います。今回参加いただいた方の中から湖北や滋賀県に愛着を持ち、その中で活躍される方が育たれることを願ってやみません。

長浜赤十字病院

所在地 ： 〒526-8585　滋賀県長浜市宮前町 14 番 7 号

TEL ： 749-63-2111　FAX ： 0749-63-2119

URL ： https://www.nagahama.jrc. or.jp

特集

市立長浜病院

病院理念

地域住民の健康を守るため、
「人中心の医療」を発展させ、地域完結型の医療を推進します。

病院概要

開設者	長浜市
院長（長浜市病院事業管理者）	高折　恭一
設立	昭和 19 年（平成 8 年 5 月現在地に新築移転）
標榜科	内科、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、神経内科、脳神経外科、外科、呼吸器外科、整形外科、形成外科、心臓血管外科、泌尿器科、皮膚科、小児科、眼科、産婦人科、耳鼻咽喉科、歯科、歯科口腔外科、麻酔科、放射線科、リハビリテーション科、病理診断科（23 科）
病床数	一般病床 461 床 療養病床 104 床 計 565 床（令和 3 年 10 月現在） うち 50 床は開放型病床とし、病診連携を強化。 病室は 4 床室と個室で全室に洗面台、洋式トイレを設置。

特色

- 地域がん診療連携拠点病院
- がんゲノム医療連携病院
- 地域医療支援病院
- 診療支援棟（救急センター・ICU）
- 高度医療機器

市立長浜病院・看護局

＜看護理念等＞　優しさ　気づき　思いやり

ナイチンゲールの三重の関心を看護の拠り所として、心に届く看護実践を目指しています。

優しさとは　相手の立場にたつ　その人への最大の関心　第１の関心

気づきとは　観察　確かな情報　第２の関心

思いやりとは　熟慮した行動　心に届くケアの実践　第３の関心

＜キャッチフレーズ＞　そっと寄り添い　手の温もり　心の温もりを伝えます。

医学生・看護学生の病院見学を積極的に受け入れています。興味・関心のある方はぜひ当院までお越しください。見学は随時募集しております。

市立長浜病院
所在地：〒526-8580　長浜市大戌亥町 313 番地
TEL：0749-68-2300　FAX：0749-65-1259
https://www.nagahama-hp.jp

6
NPO法人 滋賀医療人育成協力機構

浅井東診療所では希望により４つのコースに分かれて研修しました。地域フィールドワークコースを案内していただいた松井善和氏に地元の魅力を伺いました。

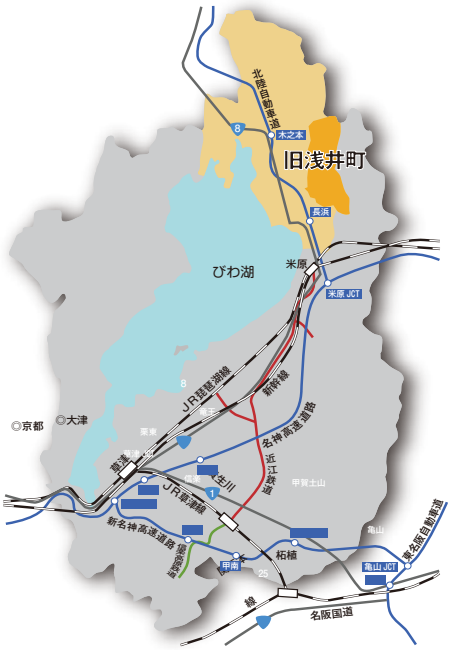
長浜市野瀬町在住　松井　善和

東浅井郡浅井町が平成18年２月に長浜市と合併して18年になります。旧浅井町は長浜の中心市街の北東部に位置し、姉川と草野川が形成する流域平野が広がる緑豊かな田園地帯です。

地域の人々は自然に恵まれ、歴史と文化を大切にし、大地に根付いて生活を営んでいます。

ここ一帯は戦国時代に日本史の表舞台となりました。天下統一を狙う織田信長とそれを阻止しようとする浅井・朝倉連合軍が戦った姉川古戦場と浅井氏の居城、小谷城跡がその双璧です。

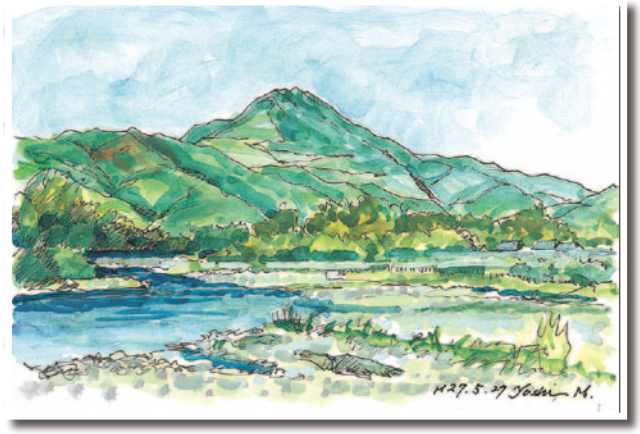
スケッチした場所は元亀元年（1570）６月28日早朝より両軍合せて五万余が激突した地、野村町と三田町の境界の姉川の河川敷です。スケッチ中、ふとどこからか兵士たちの雄叫びが聞こえて来そうでした。



この戦いに破れた浅井長政は、北西二里（約７キロ）にある小谷城に敗走します。３年後、堅牢な山城の小谷城も攻め込まれ、ついに浅井氏は滅亡します。信長の妹のお市の方は夫、長政が自刃した後、幼い三人の娘を連れて生き延びます。秀吉の側室、淀君となる茶々、京極高次に嫁ぐお初、そして徳川二代将軍秀忠の正室で三代将軍家光の母となるお江の三姉妹の数奇な運命はＮＨＫの大河ドラマでも県民の注目を集めました。

小谷城のふもとの須賀谷温泉は、戦国の秘湯と呼ばれ、長政やお市の方も利用したと言い伝えも有り、週末には家族連れや小グループの宿泊者で賑わっています。

スケッチで描いたのは、野瀬町の草野川畔にある「浅井東診療所」です。人口減少傾向の湖北地方の中でも旧浅井町とりわけ上草野地区は少子高齢化が顕著です。小学校や農協支所が統合で消えていく中、地域住民にとっては大切な存在です。



姉川古戦場より伊吹山を望む

健康パークにある浅井東診療所

地域フィールドワークの様子

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学　医学科　第１学年

２日間の研修では長浜市の医療を支える病院を見学させていただいたほか、行政の方や住民の方と交流する貴重な経験をさせていただきました。特に印象に残っているのは、浅井東診療所での住民の方々との座談会です。高齢化・過疎化が進む地域において住民の方々がどのような思いを抱いて生活されているのか（どのような困りごとがあるのか）、診療所がどのような存在なのかを直接伺うことができました。地域の課題や単なる医療行為だけではない地域における医療の役割について考えを深める良い機会となりました。

滋賀医科大学　医学科　第１学年

今回の宿泊研修では、通常では体験できないようなことを体験することができたと思います。先輩医師からのリアルな病院事情や働き方の話など聞くことができ、医師として働く将来への想像ができました。また湖北方面の暮らしや街に合わせた医療体制などを知ることができました。ご飯も美味しく街も穏やかで湖北の良さを知ることができました。

滋賀医科大学　医学科　第１学年

私は、地域枠学生の立場としてこの宿泊研修に参加させていただきました。この研修で訪れた滋賀県北部の医療機関はどこも印象的で、その土地に暮らす人たちの健康を守る上で欠かせない役割を担っていると実感できました。そして、現地で働く医師の方々と交流したり、長浜市の政策について考えたりすることで、卒業後の進路として湖北医療に携わることにさらなる興味を持つことができました。

滋賀医科大学　医学科　第１学年

もともと家庭医療には興味があったため、今回の実習で最も学びが多かったのは、浅井町の方とのディスカッションでした。

滋賀医大にいると多く関わる方は医療関係者です。医療者として医学にどっぷりと浸かることは悪いことではなく、その専門性を活かすためには必要なことです。ゆえに、一般人であった時の感覚（医学生初期までの時代）で物事を話したり考えたりするのは難しいです。

そこでやはり、地元の実際に医療を受ける人との話し合いというのはとても価値あることと言えます。私自身も、何度か医者以外への進路も考えていましたが、今回の実習のフィールドワークを通して医師として人の幸せに貢献できる価値を再確認することにも繋がり、参加して良かったと感じております。

滋賀医科大学　医学科　第２学年

浅井東診療所での研修で、全人的医療体験学習で画面越しにお話を伺った患者さんと、実際にお会いできたことが特に印象的でした。画面越しでは会話が噛み合わなかったり気難しそうに見えたりしていたのは、少し耳が遠かったせいで、実際にはよく笑う明るい方でした。話に伺っていた盆栽を見せていただいたり、当時からの変化についてお聞きしたりしました。その後で松井先生とお話しする機会があり、「訪問診療の２回目みたいだね」と言っていただきました。全人的医療体験学習、本研修を通して、ひとりの人の人生に寄り添うことを学んだように思います。

滋賀医科大学　医学科　第２学年

私は、救急医療（特に３次救急）に興味があり、高度な最先端医療ばかりに興味をもっていたが、本研修によってより視野が広がったと感じた。２日間の研修の中で、どちらかというと総合診療寄りの地域医療の現場に触れ、地域との連携の重要性に気づくことができた。地域の病院と診療所ではそれぞれ役割が分かれているが、どちらかというと病院のほうに権力が偏っていると考える。そんな中でも、地域の医療体制を知り、それぞれと連携しながら地域全体で患者さんを診る必要があるということを学ぶことが出来た。各プログラムにおいて医師はもちろん、看護師さんやソーシャルワーカーさんなど様々な立場の医療従事者の方からのお話を聞くことができ、非常に有意義な研修となった。本研修は今後のキャリア形成において必ず役立つ貴重な経験になったと思う。企画・準備に携わってくださった関係者の方々に感謝したい。

滋賀医科大学　医学科　第２学年

今回の宿泊研修では湖北地域、特に長浜市における医療の状況を学ぶことができた。

病院・診療所訪問で感じたのは、高齢社会において、訪問診療や巡回診療は必須になるだろうということだ。高齢者にとって、病院や診療所に行くというだけで大きな障壁となっており、地域に医療を提供するためには、そのハードルを下げる訪問診療や巡回診療は重要になってくるだろうと考える。

また、今回の研修で興味深かったのは、長浜市の将来を考えるワークショップだ。医療と市政は繋がりがあるとは言いつつも、医療に携わる者としては、大きく市政に関与することはないと考えていた。しかし、医療は市政における大きな一要素であり、特に地域医療においては、市政の方針に対応した医療が求められるだろう。

多角的な視点を持てるよう、様々なことに触れ、学びを深めていきたいと考える。

滋賀医科大学　医学科　第２学年

湖北地域には、人を惹きつける何かが間違いなく存在する、と今回の研修では確信しました。それは、自然の美しさかもしれません。景観の豊かさ、潜在的な社会的資源の豊富さかもしれません。あるいはその地域に根差した思い出であったり人の縁かもしれません。これによって人々はこの地域に集まっています。反対に離れていく人々がいることも統計的な事実ではあるのかもしれませんが、僕には、この地域の良さをもっと多くの人が体験できることが重要なのではないか、と感じました。

医学生の観点からは、湖北地域での研修で得られる経験は他にはない強みがあると感じました。特に家庭医や地域医療を志すならば。簡単に言えば、湖北の良さを体験した人が発信者となることでさらに多くの人々の動きが創られるのでは、といった発想です。今回の研修で得られたこの気づきを、松井先生の言葉で言えば、「初心」というのかもしれません。この初心に基づいて帰ってからの生活に変化を創っていき、どこかで湖北の医療と繋がる道を進んで行きたい。

滋賀医科大学　医学科　第３学年

研修では、実際に自分で歩いて、見て、聞いて、感じることができるので、いつも良い勉強になると思っています。やはりパンフレットを見たり授業を受けているのとは違った学びが得られます。

今回、浅井東診療所にて在宅診療に同行させていただいたことが、私としては最も良かったです。本や授業で、在宅診療について見聞きはしていましたが、今回、初めて自分で体感し色々と考えさせられることもあり、感じることができました。自分が将来、滋賀でどうするかについても、得ることが多かったです。

宿泊研修に参加して（学生の声）

滋賀医科大学　医学科　第３学年

まずはじめに、今回も貴重な機会を設けてくださりありがとうございました。

湖北をはじめとする過疎地域の話を講義などで聞いたとしても、イメージが難しいことが多かったです。しかし、今回の里親研修でフィールドワークや地域の皆様とお話しさせていただいたように、自分の目で見て聞いて感じたことで、その地域というものを少しでも学ばせていただきました。今回の経験が将来、自分が医療人として生きていく中で、医療現場への貢献につながっていくのだろうと思うと、とても楽しみですし、嬉しくもありますし、そして身が引き締まる思いでいっぱいです。

先生方との交流ができたことも、とても良かったです。

滋賀医科大学　医学科　第３学年

長浜には初めて訪れましたが、自然が豊かな山間部や観光客でにぎわう黒壁スクエアなど街の顔が様々あり、大変興味深く感じました。長浜赤十字病院や市立長浜病院などの中核病院や中之郷診療所などの診療所の役割などの説明をお聞きしながら求められる医療について考えました。

また、浅井東診療所では訪問診療に同行させていただきました。訪問診療を実際に体験し、患者さんやご家族の生活背景が密接に医療と関係していることを改めて感じました。２日間ではありましたが、長浜の発展に尽力されている方々の熱い思いを充分に感じることができた宿泊研修でした。

この研修に参加させていただきましたこと感謝申し上げます。

滋賀医科大学　医学科　第６学年

私は、WSにのみ参加させていただきました。長浜という土地自体には、今まで何度が訪れたことがある程度でしたが、皆で話し合いペーパーを作っていくという作業は、地域のことを親身になって考えるには最適な方法だと思いました。自身と全く違う観点から地域を見ている意見がたくさん出てきて、私自身とても勉強になりました。

滋賀医科大学　看護学科　第１学年

今回の研修で、医療と行政、また各病院や診療所間での連携が重要だと改めて強く感じた。今回訪れた長浜市は市を挙げて医療課題に取り組み、各病院間では役割分担を行っていた。医療と行政は切り離せない関係にあり、医療の質や提供体制は市民生活にも大きな影響を与える。里親の宿泊研修は今回で二度目だが、自分の地元も含めて今まで見てきた地域の中で一番「地域医療」というものを強く感じた。ゆくゆくは自分も医療者として現場に出ることになる。まだどのように働くかは決めていないが、ただ医療を提供するだけでなく行政との連携も含めて、患者さんが地域で生活していくための医療という観点を忘れずにいようと思った。

滋賀県立大学　人間看護学部　第１学年

地域医療を学びたいという理由で今回参加させていただきました。学校の授業の実習として地域医療を学ぶより、実際に現地に行き、その土地の雰囲気や住民の方と交流することができるので、どのような医療がその地域に適するのかなど学校とは異なった様々な視点で地域医療について考えることができました。またいくつかの病院を見学することができ、同じ地域でも各病院にそれぞれの特徴があり、どのような分野に力を入れており、ホスピタリティが異なっていることを知ることができ非常に面白かったです。

滋賀医科大学　医学科　第６学年

今回の宿泊研修では、諸事情により長浜市とのワークショップのみの参加となった。

ワークショップはワールドカフェ方式で実施された。参加者はワールドカフェ方式の進行手順はそれなりに理解できていたが、意図をいまいち理解できていない様子だった。ワールドカフェ第１ラウンドのメンバーは皆が積極的に発言してくれたので活発な意見交換ができたが、第２ラウンドではなかなか参加者の積極的な発言がみられなかったり、ファシリテーターが喋りすぎてしまったりといったことがあった。ワールドカフェのルール（1.参加者との対話を楽しむ、2.発言している人の意見をきちんと聞く、3.質問して対話を広げる、4.他人の意見を否定しないで受け入れる、5.テーマを意識する、など）を開始前に共有しておくべきだった。とはいえ、正直、行政とのワークショップでワールドカフェが出てくるとは想像していなかったので驚くと同時に（失礼。前職が行政の技術職だったので偏見があったかもしれない）、最近の行政は、もしくは市町の行政はトレンドにのった柔らかい頭の人たちがいらっしゃるのだと知って私の頭も柔らかくなった。司会の方々もとても魅力的なプレゼンテーションをされていて、楽しませて頂いた。「30年後に長浜に住む若者の笑顔のために大切なことは？」というテーマでの対話は明るい未来を作るためのアイデア出しであり、皆で頭を捻って考えた経験はinterestingであっただけでなく、実は日々の勉強や業務の合間に常に意識しておかねばならない基本的な課題なのだと気付かされた。そもそも医師を目指したのは子どもたちのために少しでも住みよい社会を限られた地域でだけでも実現したかったからだった。眼の前の患者さんに向き合いつつ、社会や未来にも眼を向けながら自分の役割を果たしていきたいと思う。

滋賀県立大学　人間看護学部　第１学年

普段議論をするのは同じ学部の人や家族など、どこか理解してもらいやすい環境でしていることに気づいた。例えば、同じ学部の人と話すと看護や医療など無意識に焦点がしぼられている。また、家族や友達と話すと多くの共感を得られ自分の意見は正当なものであると慢心してしまう。今回は、年代・立場・性別が様々且つ初対面の人と意見を交わせて良かった。

研修に参加する前の私は、問題の渦中の人々を「かわいそう」と、自分や社会構造とは切り離した理解で止まっていたと思う。本当に重要なのは、マジョリティーに有利に設計されているいびつな社会構造と、そのいびつさによって守られている自らの特権を認識することだと気がついた。それが欠けていることに、私は危うさを感じた。反対に、社会は基本的に「フラット」で「平等」であり、「一部の心ない人が差別する」という誤った認識は根強い。時代を理由にした認識から、社会構造を問う認識へとアップデートする必要性を感じた。失礼ながら、この研修に参加するまで、私は長浜市は自分が住んでいる大津市と正反対な場所だと考えていた。しかし、ワークショップや散策、交流会を通して、長浜市に住んでいる人たちは大津市に住んでいる私たちと同じであり、寧ろ、これからの在り方をより先まで見据えて地域をつくっていると思った。例えば、診療所とデイケアを近くに設置したり、研修医のための宿泊施設を用意したりとその地域の人々が健康に生きていくためのプラスが沢山成されていた。だからこそ、自身の特権(ここでは、交通の便、商業施設の多さなど）に気づかなければいけないと感じた。

自分の特権に気づくのは難しいことであるが、最低限、「知らない間に自分の無知さが誰かを踏みつけているかも」と自らの特権へのアンテナを張るくらいはしなければいけないと考えた。

滋賀県では、将来県内で地域医療に貢献する意思を持った医学生に対して、以下の取組を実施しています

◆医学生向け貸付金

令和７年度は募集対象を１、２年生まで拡大する予定です。
※最新情報は「滋賀県医師キャリアサポートセンター」HPに掲載します。

資金名	A 滋賀県医師養成奨学金	B 滋賀県医学生修学資金
募集人員	16名	６名
貸与対象者	滋賀医科大学医学部に地域枠で入学した者	全国の医学部３年生（滋賀医大生も可）
募集時期	滋賀医科大学医学部入学時	医学部３年生在学時
貸与期間/金額	１年生～６年生（６年間） 年額180万円 （総額1,080万円）	３年生～６年生（４年間） 年額180万円 （総額720万円）
返還免除条件	・返還免除対象施設※1に９年間勤務すること（ただし、臨床研修を除く７年間のうち、A群※3病院を除く返還免除対象施設で４年以上勤務すること） ・キャリア形成プログラムに参加すること（次ページ参照）	・返還免除対象施設※1に６年間※2勤務すること（ただし、臨床研修を除く４年間※2のうち、A群※3病院を除く返還免除対象施設で２年以上勤務すること） ・キャリア形成プログラムに参加すること（次ページ参照）
	※１　返還免除対象施設 ①県内の病院 ②県内の診療所（総合診療専門研修プログラムにおいて基幹施設または連携施設とされている診療所、在宅療養支援診療所に限る） ③県内の行政機関（公衆衛生医師として勤務する場合に限る） ※２　令和７年度から貸与を受ける１、２年生は県内従事期間が変更となる予定です。 ※３　A群　二次医療圏において大津、湖南圏域を指す。	

★上記の貸付金制度は、県内医療機関への就業義務の履行を一時中断し、大学院への進学や国内外の医療に関する研修の参加、県外勤務を行うことも可能です。
※一時中断の期間は上限があります。
A、Bともに最大10年間＋産前産後休暇もしくは育児休暇またはこれらに相当する休暇取得期間
（上記10年間のうち、返還免除対象施設以外の医療機関で診療業務等に従事しているとき（研修を除く）等の期間は最大４年までです。詳しくは、各制度の貸与要綱等をご確認ください。）
★返還事由に該当したときは、貸与した貸付金を利息とともに一括で返還いただきます。

〈A 医師養成奨学金〉

在学中						就業義務期間中（返還免除対象施設で勤務）								
1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	7	8	9
180万円	180万円	180万円	180万円	180万円	180万円	臨床研修		７年間のうち、A群病院を除く返還免除対象施設にて４年以上勤務						

キャリア形成卒前支援プランによる支援 → キャリア形成プログラムによる支援

〈B 医学生修学資金〉

在学中				就業義務期間中（返還免除対象施設で勤務）					
3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
180万円	180万円	180万円	180万円	臨床研修		４年間のうち、A群病院を除く返還免除対象施設にて２年以上勤務			

キャリア形成卒前支援プランによる支援 → キャリア形成プログラムによる支援

◆キャリア形成卒前支援プラン（在学中）

【キャリア形成卒前支援プランとは】

地域医療へ貢献する意思を持つ医学生に対し、地域医療や将来の職業選択に対する意識の向上を図り、地域医療に貢献するキャリアを描けるよう支援するプランです。

【参加対象者】

・**地域枠で入学した学生（＝Aの被貸与者）**
・自治医科大学の学生
・その他キャリア形成卒前支援プランの適用について同意した学生
（**滋賀県医学生修学資金の貸与を受けている学生（＝Bの被貸与者）**等）

【プラン内容（例）】

・県内で活躍する先輩医師等を講師として招き、キャリア形成や地域医療への貢献、 滋賀県で働く魅力等について話を聞く機会を設ける。
・一泊二日の宿泊研修を行い、地域の医療機関に勤務する医師や看護師、地元住民　の方と直接交流する機会を設ける。

◆キャリア形成プログラム（卒後）

【キャリア形成プログラムとは】

以下の①、②の両立を図る制度です。
①対象医師のキャリア形成を支援し、滋賀県の地域医療を支える人材を育成すること。
②医師が不足する医療機関への医師を派遣することにより、県内の医師偏在を解消すること。
滋賀県医師キャリアサポートセンターが対象医師と面談し、県内で希望するキャリア形成ができるよう支援します。

【参加対象者】

・**地域枠で入学し、卒業した医師（＝Aの被貸与者）**
・キャリア形成プログラムの適用を希望する医師
（**滋賀県医学生修学資金の貸与を受け、卒業した医師（＝Bの被貸与者）**等）

◆お問い合わせ先

滋賀県 健康医療福祉部 医療政策課 医療人材確保係
TEL：077-528-3613　　E-mail：ef00070@pref.shiga.lg.jp

滋賀県医師キャリアサポートセンターHPはこちら→

滋賀県医師キャリアサポートセンター

(滋賀県地域医療支援センターからのお知らせ)

2024年4月付でセンター長が交代しました!

切手 俊弘
滋賀県健康医療福祉部 次長

このたび「滋賀県医師キャリアサポートセンター」のセンター長を務めることとなりました切手 俊弘です。

さて、本県では「変わる滋賀 続く幸せ」を基本理念とする次の時代を展望した基本構想を策定し、人々の価値観が多様化する中において、誰一人取り残さない共生社会を志向するSDGsの実現を目指して、「経済」、「社会」、「環境」が調和した持続可能な滋賀を皆さんの力を合わせてつくろうと頑張っています。

とりわけ、健康・医療・福祉の分野については、誰もが状態に応じて適切な場所で必要なサービスを受けられる「滋賀の医療福祉」の実現を目指した取組を進めています。

県民の皆さんに切れ目なく適切な医療サービスを提供するためには、医師をはじめとした医療従事者の人材確保・資質向上に向けた取組が大変重要であると考えています。全国的な医師不足が続く中、県内の病院の医師数は徐々に増加していますが、診療科や地域の偏りなどの課題があります。

その中で大きな役割を担うのが、「滋賀県医師キャリアサポートセンター」です。当センターは、滋賀県で働く医師の更なる充実を図るため、県医師会や県病院協会等の御協力を得て、滋賀県と滋賀医科大学が共同で設置している組織です。

県と大学と県内の病院が一体となって、将来地元に根差した医療を提供してくださる医師を育てていきたいと考えています。多くの医学生、医師の皆さんの御参加・御相談をお待ちしています。

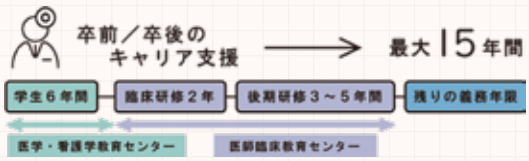
略歴：平成９年３月　大分大学医学部卒業
平成30年４月　滋賀県庁入庁
平成30年７月　湖東健康福祉事務所（彦根保健所）所長
令和２年４月　滋賀県健康医療福祉部薬務感染症対策課 課長
令和２年６月　滋賀県健康医療福祉部医療政策課 課長
令和６年４月　滋賀県健康医療福祉部 次長
国立大学法人滋賀医科大学特命教授、日本褥瘡学会理事

滋賀県医師キャリアサポートセンターとは?

滋賀県の地域医療支援センターとして、地域医療に従事する医師の確保・定着のため、県・滋賀医科大学の共同で設立されました。

センターでは、県奨学金被貸与者の面談や、総合相談窓口等設置による若手医師等の就労支援に取り組むとともに、キャリア形成プログラムと卒前支援プラン（以下参照）により、継続的なキャリア形成支援体制を強化しています。

滋賀県医師キャリアサポートセンターで支援します！



定期面談／相談窓口

入学から卒後まで、センターの専任医師を交えた定期面談を行い、キャリアに関する相談を受け付けています。卒業後の進路や研修時の不安なども相談しやすい環境作りに努めています。

総合相談窓口では、医学生、医師からの各種相談のほか、滋賀県内での就業を希望する医師の求職支援や、女性医師のキャリア復帰のサポート等も行っています。

卒前支援プラン

在学中から滋賀県の地域医療について学べる取組として、複数のイベントを用意しています。

- キャリアサポートセンター懇談会（年２回程度）：先輩医師との懇談会
- 課外授業シリーズ（年５回）：医師に求められるスキルや知識の実践的講義
- 里親宿泊研修（年２回）：地域医療と文化・歴史を学ぶ宿泊研修
- 自治医科大学　夏季地域医療実習：さざなみ会（自治医大）と共催

キャリア形成プログラム

「滋賀県医師キャリア形成プログラム」は、県内の医師が不足している地域における医師の確保と、当該地域に派遣される医師の能力開発・向上の機会の確保の両立を目的として、対象となる医学生や医師に今後のキャリアパスや習得可能な資格・技能等をあらかじめ明示し、自らの将来像を描けるようにするものです。滋賀医科大学や県内医療機関、関係団体等の協力のもと策定し、研修中の医師がスムーズに自身のキャリアを築くためのプログラムとなっています。

お問い合わせ先

滋賀県医師キャリアサポートセンター
滋賀医科大学クオリティマネジメント課　病院研修係内（附属病院D棟1階）
住所：〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町
TEL：077-548-2826　E-mail：ishicsc@belle.shiga-med.ac.jp

相談窓口も設置しています。
詳しくはキャリサポHPをご覧ください。

第一弾！ 地域医療と社会起業　二足の草鞋を履いてみる

藤田医科大学 総合診療科
一般社団法人 MATSURI　代表理事　**山地　翔太**先生

この度は、向所先生と地域医療や学生教育について意見交換をさせていただいた際にお声がけいただき、今回の貴重なご機会を賜り、尊敬する滋賀の先生方の胸をかりる想いで、講演させていただきました。

冒頭はライフラインチャートという内省のワークを使用して、私自身が経験した家庭での経験、パートナーとの経験、その時の感情について共有しました。私はこの原体験を経て、変えることが困難な状況でも対話が人を癒すことがあると気づき、人と向き合うことが自分の大切な価値観になり、視点を人が置かれた環境にまで向けるようになりました。それが総合診療医を目指したきっかけであり、そうした営みが時に自分をも癒し、活力をもらい、自分の生きがいになっているという気づきが研修時代に生まれ、今も総合診療医を続ける原動力になっているとお話ししました。この語りを通じて、一人の人間が総合診療医になるまでの、出来事、感情、考え方の変遷を例示的にお伝えできたのではと思っています。

次に、リーダーシップについてお話ししました。ここでは、知ること、理解すること、行動することの間には、大きな差があるということを、お伝えしました。私は総合診療医には、超人的な能力は求められていないと感じています。我々の底力が試される状況の殆どは、複雑かつ困難であるがゆえに、課題が認知できても、解決の糸口が見えてこないような患者さんと出会ったときです。場合によっては、真の課題すら曖昧なこともあります。そのような混沌とした状況では、幾分かの思い切りと勇気を持って、まずは手探りで行動してみることが求められています。狙いは持ちすぎず、まず患者さんの語りに耳を傾け、想いを聞いてみる。患者さんの願いを叶えるために力を貸してほしいと、スタッフ、家族、友人、時に近隣住民にまで、まずは素直に打ち明けてみる。そうした行動が、思いがけない展開を生むことがあることを私たちは知っています。マインドは確かに大切ですし、第一歩ではありますが、想いを持った日々の何気ない行動の蓄積こそ、医師を総合診療医たらしめることをお伝えしました。総合診療医に備わっていく、そうした泥臭いリーダーシップを私はかっこいいと思っていますし、聞いてくださった皆さんが今後どんなことであれ、想いを大切にして行動されることを、応援したいと思ってお話しいたしました。

滋賀医科大学、滋賀県医師キャリアサポートセンター、滋賀医療人育成協力機構の皆様、この度は貴重なご機会を本当にありがとうございました。

第二弾！

「医療とアート/デザイン」に思うこと

厚生労働省健康・生活衛生局健康課地域保健室
主査　松下　　詢先生

こんにちは。厚生労働省の医系技官として働いている松下詢（滋賀医科大学医学科39期、ボート部）です。霞が関で地域住民の疾病予防や健康危機[i]管理に関する施策に携わっています。今回、同期の髙石亮太先生と共に、医療とアート／デザインを主題とした講演の機会をいただきました。この記事では、講義の主題に関連した私の雑感を少し述べたいと思います。

詳細は割愛しますが、私の問題意識は施策に対する地域住民個々人や、地元関係団体のコミットメントをどのように維持・向上させるべきか、あるいは危機に陥った際の行政組織は、どのような意思決定をすべきなのかといったところにあり、それらにデザイン思考や公共デザイン等の知見が応用できるのではないかと考えています[ii]。。。といっても、それらは目の前の業務や社会課題を直ちに解決してくれません。残念ながら臨床現場と同じく、公共政策の現場にも『銀の弾丸』[iii]はないのです。実際、私も省内の関係部局内の調整、様々なステークホルダーとの交渉、文章や計画の微妙なニュアンスの調整に四苦八苦し、「医系技官の意義とは何か」ということに疑問を抱くこともあります。読者の皆様の中にも、公共政策や公衆衛生というと、官僚的で物事が遅々として進まない、臨床や生活に意味があるのかよく分からない、政治的に物事が強引に進んでしまうといったように、どちらかというとネガティブなイメージを抱かれる方もおられるでしょう[iv]。

それでも私は、政策や政治とは異質な[v]デザインやアートの方法論が持つ、既成概念や分断を飛び越える力、論理のない混沌からも何かを生み出そうとする力、多元的な意味が第三者的に生成される力、といったものが、私が相対している『公』を理解する際に役立つのだろうと感じています。受講された方はスッと納得できなかったかもしれませんが、「もしかしたらそういうことって医療や臨床にも関係する大事なことなのかも」と感じるきっかけになったのなら私の狙いは果たせたと思っています。

追記：講演の開催にあたり、浅井東診療所の松井善典先生と、滋賀医科大学の向所賢一先生にご協力いただいたことを御礼申しあげます。なお、記載内容は全て筆者個人の意見であり、筆者が所属する機関を代表するものではありません。

ⅰ 健康危機とは、地域保健法第四条第三項によると、「国民の生命及び健康に重大な影響を与えるおそれがある疾病のまん延その他の公衆衛生上重大な危害が生じ、又は生じるおそれがある緊急の事態」のことを言います。

ⅱ デザイン思考、公共デザイン、コモン、新制度派経済学等のキーワードにピンと来た方は、ChatGPTやPerplexityで調べてみて下さい。もしかしたら、医学部で学ぶことのなかった新しい世界が貴方を待ち受けているかもしれません。

ⅲ 西洋の民間伝承で、銀には狼男やバンパイアを倒すことができる魔力があるとされた。それが転じて、複雑な問題を一挙に解決できる方法のメタファーとして使用される。医療の文脈では、新しい抗生剤や抗がん剤の登場等で用いられる。

ⅳ ここで少し私の考えを説明しておくと、医学部で学ぶ公衆衛生は、公衆衛生の研究方法と今までの研究で得られた知識であって、公衆衛生の『実務』の部分にはあまり触れられていません。では、公衆衛生の『実務』とは何かというと、「公衆衛生という専門的知識と方法を、個別的・具体的なケース・国・地域に落とし込むための一連の政策過程」であり、政治過程論や社会倫理、組織管理学などの分野を含んでいます。ちなみに、これらは地域医療やプライマリケアに携わる医療従事者にも必要なスキル・マインドセットであり、プライマリケア医のコンピテンシーとして、「連携重視のマネジメント」「地域包括ケアを含む地域志向アプローチ」「公益に資する職業規範」という項目が掲げられていることからも頷けます。

ⅴ 歴史上、絵画や建築的意匠は時の為政者の権威を示すため、あるいは逆に貶めるために用いられてきたことを鑑みると、全く関係がないわけでもないでしょう。

第二弾！

「医療とアート・デザイン」

浅井東診療所　髙石　亮太先生

この度「学内で地域医療の体験ができる」課外授業シリーズの一コマを担当させていただきました。私は2019年に滋賀医大を卒業後、２年間の初期研修を経て、現在は家庭医療を学んでいます。今回の課外授業では「医療とアート」というテーマでお話をいただきました。これは私が大学でアートを学んでいることから、いただいたお声がけなのだと思います。医学部を卒業後に、アートを学ぶために大学に入るというのは、どうしてもイレギュラーな進路というか、客観的に奇妙なことだと思います。しかし私も、もともとアートが好きではありましたが、美大に入学するなどということは、卒業したときも、初期研修を終えたときも、全く想像もしていなかったことです。

「困難が人を強くする」ということはよく言われます。人は何かの壁に直面したとき、それをなんとか乗り越えようとして、ときに自分のスキルを磨き、ときに新たな突破口を見出し、その結果新たな高みに到達し、成長していくということだと思います。私がアートを学問として本格的に学ぼうと考えるようになったその過程には、医師になり、医療が抱える様々な課題に直面し、医局や病院あるいは総合診療科という組織の実体と目の前の患者さんの実像の間に乖離を感じ、その度に苦悩してきた経験が確かにありました。しかし私の場合、そうした壁を乗り越えようという、人から褒められるような動機で今のキャリアを選択したのでは決してありません。正直なところ私は、そうしたことから逃げる気持ちが強くありました。端的に言えば医師であることが嫌になったのです。自分自身の弱さも感じました。そんな中、専門医プログラムを休止し、大学で勉強する中で、美大の先生が私に言ってくださった言葉が、大きな転換点となりました。「あなたにはあなたにしかできないことがある。私はそんなあなたの作品が見たい」という言葉です。そのとき私は、自分自身がこれまで積み上げてきたものを無駄にしようとしていること、患者さんの真に健やかな人生を支えていきたいという医師になった頃の当初の気持ちを思い出しました。医師という仕事から一度距離を置いたことで、その職責の尊さも新鮮な気持ちとして感じました。患者さんの健康に直接的に関わっていける医師という立場の中にこそ「私にしかできないこと」があり、そこに私自身のプロフェッショナリズムを自覚しました。そして私は幸いにも、美大での学びを医療に効果的に活かせるポテンシャルを持っている「家庭医療」の専攻医であったのです。

私が今学んでいるのはアートではなくデザインです。アートとデザインの違いや関わりについては、紙面を割くので言及を避けますが、医療の世界により広く関連付けやすいのはアートよりもデザインだと感じます。いずれにしても、私たちが芸術に触れたときに感じる心の動きが、患者さんを、地域を、健康で豊かにすると信じています。私にしかできないことこそが私の「作品」となるべく今に向き合っています。皆さんにも皆さんにしかできないことがきっとあると思います。そんな皆さんの活躍が医療を彩る世界を、私は夢見ています。

第三弾！

地域医療×公衆衛生
家庭医から学ぶ！地域住民集団の健康を守る方法

医療法人滋賀家庭医療学センター
弓削メディカルクリニック　**中村　琢弥**先生

この度、通年にわたって実施されている「学内で地域医療体験ができる」課外授業シリーズにて光栄にも登壇させていただきましたため報告いたします。私の会のテーマは「家庭医×公衆衛生」になります。今回は少しその内容を紹介させていただきます。

さて、皆さんは、「公衆衛生」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか？ 実は、私たちの健康は、医療機関の診察を受けることだけでなく、様々な要因によって守られています。例えば、安全な水や食品の提供、感染症の予防対策、健康的な生活習慣の啓発など、地域全体を対象とした取り組みが、私たちの健康を支えているのです。これを公衆衛生と呼びます。私が専門とする家庭医療は、個人だけでなく家族やコミュニティ全体の健康を支えるような分野なのですが、その視点を持つ家庭医は、公衆衛生領域にも大きく貢献できます。地域住民一人ひとりの健康状態を把握し、その家族背景や生活環境まで考慮することで、より効果的な健康増進活動や病気の予防対策を行うことができるからです。

今回の会合では私自身が滋賀県竜王町に赴任することになった経緯、そして、一人の家庭医として公衆衛生をジョンズホプキンス大学公衆衛生大学院修士課程にて学ぶに至った流れを有志で集まってくださった学生の皆様に向けてざっくばらんに話させていただきました。そのうえで、実際にどのような活動にてその知識や技術を日本の地域医療の現場に還元したのかを具体例を交えて講演させていただきました。最後には学生にも参加いただける形式のワークを用意し、「実際に貴方がこの地域の公衆衛生担当者ならどう行動するか」をいろいろな角度からグループで話し合っていただける時間を用意しました。学生の皆様は終始熱心に取り組んでいただき、とても盛り上がる会合となりました。

私の事例にて、公衆衛生の知識やスキルを活かすことで、地域医療の課題解決に貢献できるようなキャリアパスの一例を学生のみなさまに知っていただけたら嬉しく思います。実際こうして公衆衛生を学ぶことは、将来、地域医療の現場で活躍するために必要な知識とスキルを習得するだけでなく、キャリアの選択肢を広げ、社会に貢献するための大きな一歩となるでしょう。

今回、私自身にとっても自身のキャリアを振り返るきっかけをいただけましたこと、関係者の皆様に心より感謝いたします。今後も皆様とともに良い医療を展開し、ともに学ぶことができましたら嬉しく思います。

第四弾

家庭医療×まちづくり
医療と地域の新しいつながりを考える
～全ての医療従事者、学生のために！人と地域の絆を学ぶ～

東近江市永源寺診療所
所長　**花戸　貴司**先生

第四弾は、20年以上訪問医療を行ってこられ、地域丸ごとケアを考えておられる花戸先生を講師にお迎えしました。「家庭医療×まちづくり　医療と地域の新しいつながりを考える～全ての医療従事者、学生のために！人と地域の絆を学ぶ～」と題して開催されました。

花戸先生ご自身の現状のお話を含め、介護についてお話しいただきました。人口減少社会の中で、単身の高齢者の増加がみられることで、本人だけでなく介護家族も含めて社会的孤立にならないようにすることが大事だということ、地域とのつながりが大切だということをお話ししていただきました。先生の診療所内にはフィットネスジムやレストランが併設され、若者から高齢者までの健康づくりや地域のコミュニケーションの場となっており、学生の皆さんには新しい気づきとなる貴重なお話しでした。今回、随所にクイズや質問を取り込んでいただきQRコードで回答するなど、今までにない形で参加することができました。質問も途切れず、丁寧にお答えいただき有意義な時間を過ごすことができました。

学生の感想（抜粋）

- 高齢化や人口減少など、現在の日本社会にある問題について、具体的なデータやグラフを見て理解を深めることができました。
- 花戸先生が、高齢化・人口減少が進む社会の中で、抗いながらも前に進んでおられる様子が印象的でした。また、私はコミュニティづくりにも興味がありましたが、そのヒントを得ることができました。
- 介護される人だけでなく、介護者を支援する体制を拡充する必要があることが大きな学びとなりました。
- 海外は家族以外に友人や近所の人に頼る場合が多いことに対して、日本では家族以外に頼ることのできる人がいない場合が多いことが印象に残りました。

第五弾！

課外授業第五弾に参加して

「地域ケア・まち歩き」出会いと歩みで ”みるみる“めぐる長浜城下町ツアー

滋賀医科大学医学科第２学年
荒木　泰人

今年度の課外授業シリーズを第１弾から受講させていただき、地域医療や総合診療について様々な角度から学ばせていただきました。最終回の第５弾は、大学の外に出て看護師・保健師・まちづくりの専門家（都市計画家）の方々と一緒にまちを歩きながら地域のみかたを学ぶというとりわけユニークな回でした。２回生の普段の講義では基礎医学以外について触れる機会が少なく、学外に出て医師以外の方のお話を聴くことができたのは貴重な経験でした。

まち歩きで記憶に残っていることの１つは、訪問看護師の北川さんが訪問に行くときにどういうところをみるかという質問に対して、一例として「屋根をみて、ちゃんと手入れされているかどうかをみる」と話されていたことです。私が素通りしてしまうような何気ない景色から情報を感じ取る視点が新鮮で勉強になりました。同じく北川さんがお話してくだった、訪問先の認知症の方に湖上水運で使われていた丸子舟の話をしたところ意気揚々と返答があり、そこから話が広がって人となりを知っていくことで、その方をみる目が単に「認知症の方」ではなくなったというエピソードも印象的でした。都市計画家の竹村さんも、かつての町並みや建物の由来などを説明してくださるなかで、こういうことを知っていると地域の人の食いつきや話題の広がり方が違うということをおっしゃっていて、医療のことだけでなく地域のことや社会のことにアンテナをはって知っておくことが大切であると感じました。保健師の織田さんにお話しいただいたびわ町での糖尿病教室でのエピソードは、地域それぞれの特性や生活があり、必ずしも健康が第一ではない人たちもいるなかで、地域診断と健康づくりをどのようにつなげていくかについて考えさせられました。

私はこれまで「地域」という言葉について「その場所・土地」という空間的な意味合い以上に考える機会がなかったように思います。今回のレクチャーや散策・対話を通して、“地域”を考えるうえでの多角的な視点を知ることができました。貴重な機会をありがとうございました。

第五弾！

課外授業第五弾を企画して

「地域ケア・まち歩き」出会いと歩みで ”みるみる”めぐる長浜城下町ツアー

浅井東診療所　所長　**松井　善典**先生

NHKのブラタモリという学際的旅番組が大好きな私にとって、今回の第５弾の企画は地域を診る互換を養うため､「“地域ケア･まち歩き”出会いと歩みで“みるみる”めぐる長浜城下町ツアー」と銘打って滋賀医大生向けの“ブラタモリ”的な企画として位置付けた。

身体診察が診断における重要な医学情報であるように、地域のとある通りの視診や賑わいの聴診、そして訪問診療する家屋の雰囲気をつかむことは地域を知る上で大切な情報となる。その町の互助の力が透けて見えたり、住民さんたちが大切にしている地域の宝物を感じ取って話題にして勇気づけたり歴史を辿ったり、家の玄関から寝室までの道のりで介護力や家族の歴史を感じたり。どうにかしてこの感覚を学生さんたちに伝えたい。

そのための旅のゲストは浅井東診療所の立ち上げ前から縁があった織田保健師さんと北川訪問看護師さんである。織田さんは地域行政の現場からトップマネジメントまで手がけた地域保健のスペシャリストで、北川さんはコミュニティナースの視点をもつベテラン訪問看護師さんである。このお二人との仕事やケアのなかで、地域を看る力を存分に教えてもらったので、ご一緒に旅しながら患者さんや住民との関係の話は私自身も学ぶことが多かった。何より学びになったのは、地域を看る時や地域に関わる時の「これまでの時間の流れ」を看ることであり、家族や町の課題を関係の中で「大切な歴史や経緯」として受け止め理解することである。

また是非とも加えたかったゲストが長浜まちづくり株式会社の竹村さんである。浅井東診療所の立ち上げ直後、長浜市の総合計画を立てる市民懇話会でご一緒したのが縁であり、その後たびたびお仕事をする機会に恵まれた。まちの風景プランナーでもありイベントの仕掛け人でもあり、何より長浜の魅力をさまざまな角度や視点で描き出すプロデューサーでもある。こんな人物と出会って地域の仕事ができる家庭医は幸せ者である。そんな地域を愛して地域を元気にしている方と医学生さん・看護学生さんとが出会うことが重要でもある。そして彼が何を語るかににも大変含蓄があったのだが、それ以上に彼が地域をどう語っているのかの試行錯誤と意気揚々のお姿にも学ぶことの多い時間となった。

改めて滋賀の魅力、長浜の魅力を感じたたった３時間の旅。でもその３時間の経験が参加した学生さんの３年後や30年後にむけて「地域で活躍する人の魅力」そして「これからの時間の流れ」に思いを巡らせる企画にもなった。次は滋賀のどこの街で、誰をゲストに滋賀医大版“ブラタモリ”をしようか今から楽しみである。

入会・ご寄附のご案内

皆様からの会費とご寄附金を財源として活動を進めてまいります。出費がかさむ折とは存じますが「地域医療を担う医学生看護学生の育成支援事業」にご支援いただける方々のご協力をお願いいたします。

会員は

会員の種類		会　　費	入会金（初年度のみ）
正会員	個　人	年会費　2,000円　＋　寄附金 3,000円以上	5,000円
	団　体	年会費　5,000円　＋　寄附金 5,000円以上	10,000円
賛助会員		毎年 1,000円以上 できましたら 3,000円以上	

ご寄附・賛助会費をご入金された方は「税制上の優遇措置」【寄附金控除、または寄附金特別枠控除（税制控除)】を受けることができます。

ご入金された方には「寄附金の受領書」を郵送しますので大切に保管いただき、確定申告時には、「申告書」に「寄附金の受領書」を添え最寄りの税務署にご提出ください。

なお、詳細につきましては、最寄りの税務署にお問い合わせください。

編集後記

日頃は機構の活動にご支援ご協力賜り誠にありがとうございます。早いもので設立から13年が経過しました。滋賀県の医療と歴史・文化に興味を持ち、積極的に宿泊研修や講演会などに参加されていた学生が、今度は講師や里親の立場でかかわってくださることが増えてきました。地域の医師、看護師としてご活躍されていることを嬉しく思っています。滋賀県の地域医療の担い手育成のため、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

NPO法人滋賀医療人育成協力機構 広報誌「めでる」vol.24

発　　行：2025年３月31日
編　　集：NPO法人 滋賀医療人育成協力機構
所 在 地：滋賀県大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学内
ＴＥＬ：077-548-2168
ＵＲＬ：https://www.shiga-iryo-ikusei.jp/